

羅 針 盤

第 **13** 号

令和6年9月2日（月）



◆ 9月1日は「防災の日」

昨日の9月1日は、「防災の日」でした。大正12年（1923年）9月1日午前11時58分に、東京・神奈川を中心とする関東地方で「関東大震災」が発生しました。今から100年以上も前の出来事ではありますが、死者、及び、行方不明者は推定で10万5000人を越え、明治以降の地震被害としては最大規模の被害であったと言われています。阪神・淡路大震災では建物倒壊による圧死、東日本大震災では津波による溺死が多かったのに対して、関東大震災では火災による焼死が多かったそうです。関東大震災が発生したときに、日本海沿岸を北上する台風が存在し、台風によって吹き込む強風が関東地方にも吹いていました。また、当時の東京都内は木造建築での住宅が密集しており、正午前という時間帯も大きく影響したことにより、火災が広範囲にわたって発生してしまったことが大きな原因となっていました。関東大震災によって甚大なる被害を受けたことで、「政府、地方公共団体等の防災関係諸機関をはじめ、広く国民が、台風・豪雨・地震等の災害についての認識を深め、これに対処する心構えを準備する」という主旨で、防災啓発を目的として9月1日が「防災の日」として制定されました。また、8月30日から9月5日までの一週間を防災週間としています。首都直下地震や南海トラフ地震、日本海溝・千島海溝周辺の海溝型地震など、大規模災害のリスクに直面する現代の私たちにとっては、「防災の日」をきっかけとして、防災意識を構築していくことがとても重要なことです。もちろん、災害に対しては、常日ごろから注意を怠らず、万全の準備を整えていなければならないことではありますが、災害の発生を未然に防止し、あるいは、被害を最小限に止めるにはどうすればよいのかといったことを、たくさんの人たちが、それぞれの持場で、家庭で、職場で、学校で、考える機会を持つことから始めるべきことが重要です。「防災・減災」の意識を高め、お互いに「たすけある」関係づくりを、社会の構成員である私たち一人ひとりがつくりあげていかなければいけないはずです。



◆ 自然災害伝承碑

自然災害伝承碑といったものを生徒の皆さんは見かけたことがあるでしょうか。自然災害伝承碑とは、過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄（災害の様相や被害の状況など）が記載されている石碑やモニュメントのことで、当時の被災状況を伝えると同時に、当時の被災場所に建てられていることが多く、大阪市内各所に点在しています。それらの石碑を通じて伝えようとしていること、それは、地域住民による防災意識の向上に役立つ内容を記載することが大きな目的となっています。過去の自然災害の教訓を地域の方々に適切に伝えるとともに、教訓を踏まえた的確な防災行動による被害の軽減を目指す事業が各地域では進められています。



写真の「水防碑」に書かれている「災害は忘れたころにやってくる」という教訓も、私たちが忘れてはならないことの一つではないでしょうか。

